

まほろん令和7年度

第2回

館長講演会



- Lecture meeting by the director of mahoron -

日本歴史の扉を開いた遺跡(2)

東京都 大森貝塚

— 縄文時代 —

まほろん館長 石川日出志

令和7年8月23日(土) まほろん講堂 13:30~15:00

13:00 受付開始・開場

日本歴史の扉を開いた遺跡を語る 第2回

縄文時代 ー東京都大森貝塚ー

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 日本における近代的考古学は1887（明治10）年に、E.S.Morse モールズが大森貝塚（現東京都品川区）を発掘し、2年後にその研究報告が出されたことに始まります。そこからやがて縄文時代という時代が認識されるようになっていきます。「古墳時代」という時代名称が提案される前のことですが、古墳をつくる人々とは異なるという意識があるので、古墳以後の歴史と対比してみていることになります。

1. 導入：日本考古学の始まりに関する二つの見解

＊1955年『日本考古学講座』2（考古学研究の歴史と現状）、三上次男編、河出書房）から

（1）日本における近代的考古学はM.S.モールズに始まる＝定説

- ・和島誠一「日本考古学の発達 発達の諸段階」（前掲書 pp.22-36）
- ・欧米の近代科学に立脚した考古学の導入は、Edward Sylvester Morse（1838-1925）による大森貝塚（現東京都品川区）の1877年発掘・1879年報告に始まる。

（2）異説：江戸時代の有職故実研究の考古学面（「旧考古学」）が整っていた。

- ・藤田國雄「日本考古学の発達 歴史時代」（前掲書 pp.93-109）：有職故実研究を強調。
モールズ以後の「新人類学・考古学が江戸時代考古学の発達をほとんど無視したことは、今日から考えると新学問の発達に種々の点で不利益をもたらした。この傾向は伝承して今日におよんでいる。」

（3）日本の考古学の二面性（藤田のいう旧・新考古学）

- ・古墳時代以後の考古学＝遺物の用語では、江戸時代の有職故実研究が基礎をなす。
（例）武器・武具・馬具の名称：刀剣＝身み・拵こしらえ、関まち・茎なかごなど、馬具＝鞍橋くらばね（前輪まえわ・後輪しずわ）、三繫さんがい（面繫おもいがい・胸繫むながい・尻繫しりがい）
＊参考文献：後藤守一1937『日本歴史考古学』四海書房
- ・先史考古学（旧石器・縄文時代）＝欧米の近代的考古学が基礎をなす。

2. M.S. モールズによる大森貝塚の発掘・研究・報告 【1・2】

（1）M.S.モールズ（1838-1925）とは

- ・USA ポートランド生まれ。ハーヴァード大学で、進化論（ダーウィン1859『種の起源』）に基づく動物学を学ぶ、腕足類研究。
- ・1877年、腕足類研究のために来日、6月17日横浜上陸（日本滞在1877～79・82～83年）、6月19日上京途中で車中から大森貝塚発見。
- ・偶然欠員だった東京大学（この年4月に開設）理学部生物学科動物学の教授職に7月12日

発令。

(2) M.S.モールズ来日の謎：私の推測

- ・1877年4月東京大学法・理・文・医学部開設。理学部生物学科に動物学の専門家がいないのは前年から周知のこと。(当時文部卿(現在の文部大臣)不在のため)文部省のトップだった文部大輔田中不二磨(1845-1909)が、前年フィラデルフィア万博で日本の教育出品陳列のため出張、各地を訪問。(※参考文献：田中不二磨 1877『米国百年期博覧会教育報告』文部省)この際に、適任者の推薦を依頼しておいたのではないかな？

(3) 大森貝塚の発掘調査と研究報告 【1・2】

- ・発掘調査＝ 1877年9月16日予備調査ののち12月まで4回調査。
- ・archaeology→「考古学」の初出：田中不二磨 1877「大森村古物発見の概記」
- ・1879年“Shell Mounds of Omori”(矢田部良吉訳『大森貝塚古物篇』東京大学法理文学部)刊行
- ・特色：進化論に基づく生物学研究の方法(詳細な計測と記述)を遺物に援用。遺物図は画工(木村)によるが、計測による実測図。
- ・報告書でのモールズの指摘： **出土資料の分類**と具体的な記述に重点が置かれる。
 - a) 土器：土器の形と文様が変異に富む。胎土に精粗がある。手作り(非ロクロ)。口縁に突起が多い(18/37点)。cord marked impressionが多い(20/37点)。形は鉢形の椀、大鉢、口が開く椀、皿形、深い器など。用途は煮炊き・食器用・煮沸用など。
※土器破片も全形を判断して器形分類し、突起も詳しく分類する点はすごい！
 - b) 石器が極端に少ない(石鏃・石槍・石錐がない)
 - c) 食人風習：人骨は埋葬状態ではなく破片(19点)で、シカなどと同様。
 - d) 人骨：脛骨(1点)が著しく扁平(原始的特徴)
 - e) 時代名称：先史時代(the prehistoric pottery of Japan：はしがき)、磨製石器時代(the polished stone age：装身具の項)
- ・その後の指摘：ブレ・アイヌ説

(4) 常陸陸平貝塚を日本人学生が独自に発掘調査(1879年) 【3】

- ・モールズの教え子たち：唯一考古学への可能性があった松浦佐用彦の急逝22歳。
- ・モールズの大森貝塚調査に尽力した佐々木忠次郎(1857-1938：のち昆虫学)と飯島魁(1861-1921：のち寄生虫学)が現美浦村陸平貝塚を発掘調査。報告書作成(Okadaira Shell Mound at Hitachi. 1883)。土器の図はスケッチに戻る。
- ・出土土器が大森貝塚と異なる特徴もつことを確認。→大森貝塚＝薄手式(大森式)、陸平貝塚＝厚手式(陸平式)。→のちに、土器の特徴の違いが、集団の系統や部族の違いなのか、地方差・年代差なのかの議論へとつながる。

(5) 人類学の開祖・坪井正五郎(1863-1913)の西ヶ原貝塚調査(1892年：坪井1893-95) 【4】

- ・大森貝塚類似の土器群出土 → 器形・文様・突起の詳細分類はモールズを意識？

(6) 大森貝塚出土遺物を現在の眼で見ると 【2】

- ・時期：戦前に大森式土器と呼ばれた縄文時代後期中葉(加曾利B2式土器)が多数を占め、その前後(加曾利B1式や曾谷式)や晩期中葉(安行3c式土器)がこれに次ぐ。
- ・その他注目すべき点：晩期の静岡県域の天王山式土器。土版が多い。

3. その後の議論

(1) cord marked の邦訳表記

- ・モールズ 1879: cord marked→矢田部 1879: 索文→白井光太郎 1886: 縄紋 →一般化
- ・貝塚土器(坪井正五郎 1886)から縄紋土器(白井 1886)へ →一般化
- *「縄文/縄紋」と「文様/紋様」: 山内清男 1935 の「無紋・縄紋」と「文様・文様帯」
(参考) 佐原真 1981「縄紋・施紋・無紋化」, 石川=佐原が山内 1935 の使い分けを理解していないのでは混乱を招く、ならばすべて「文」でよい。「紋」は「文」から派生したのだから、

(2) 担い手・時代認識は?

- ①. モールズ 1879: 先史時代・磨製石器時代(新石器時代)*、ブレ・アイヌ説
*モールズは、はしがきで J.Lubbock 1865 Prehistoric Times を引用。ラボック 1865 は、磨製石器の無/有で旧/新石器時代を区分したので、ここでは新石器時代を意味する。
- ②. 坪井正五郎 1887: 「石器時代」
- ③. 1893 年以後、「弥生式土器」が認識されるようになって、縄文土器の認識が明確に。
 - ・人類学教室 1893「弥生式土器」名称発案: 弥生町・西ヶ原農事試験場の土器が共通し、貝塚土器(縄文土器)と異なる特徴をもつと認識。
 - ・鳥居龍蔵の弥生式土器使用者=固有日本人説(鳥居 1917)により、**縄文土器使用者は先住民と扱われるように**。 → 現在に至るまで縄文文化観に影響。
- ③'. 1896 年「古墳時代」の語の提唱も、縄文土器使用者を別扱いするのが前提。

(3) ミネルヴァ論争(1936 年): 縄文土器文化の下限をめぐる論争 【5】

- *戦前は、縄文土器が東北では弥生・古墳時代～古代にまで存続する説が多数派だった。
 - ①. 雑誌『ミネルヴァ』創刊号(1936.2)掲載の「座談会: 日本石器時代文化の源流と下限を語る」(江上波夫 31 歳・後藤守一 49 歳・山内清男 34 歳・八幡一郎 35 歳/甲野勇 35 歳)
 - ・後藤「縄紋土器の終りの時代は地方的に夫々違いがある。最後は喜田先生のいはれる鎌倉時代といふことも地方によっては必ずしも無茶な議論ぢやない。」
 - ・山内「それは一寸点頭けないですね。縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある。(略)これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴ってるのです。決して弥生式とか、古墳時代に属しているのではない。(略)従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならぬでせう。」
 - ②. 同誌 3 号(1936.4)で喜田貞吉(1871-1939/66 歳)が山内に反論: 石器時代遺跡から宋銭や鉄器が発見される。「然るにも拘らず(略)どうして石器時代の終末を以て、地方により大差なしといふ様な事を考へられるであらうか。余輩には到底判断ができぬ。(略)余輩は常識考古学を提唱したい。」
- 以後 3 回にわたって論戦するも平行線。しかし、そのあと山内による縄文土器型式の編年体系(山内 1937)、関東の縄文土器型式の標準(山内 1938)が提示され、先史考古学の方法による日本列島の歴史展開が示される(山内 1939)ことによって、戦後は山内説が定説となる。

- * 参考： 戦後、時代名称が順次、簡略化された。
 - ・縄文／弥生式土器時代→縄文／弥生式時代→縄文／弥生時代。
 - ・「…式」も土器型式（様式）だけに用いるように。

4. 大森貝塚の現在

（1）大森貝塚はどこなのか？： 二つの記念碑が相次いで建立される。

- ・1929 年 本山彦一（大阪毎日新聞社社長）が現品川区大井に「大森貝塚碑」
- ・1930 年 佐々木忠次郎（モールの教え子）が東大の記念事業として、現大田区山王に「大森貝塚碑」。

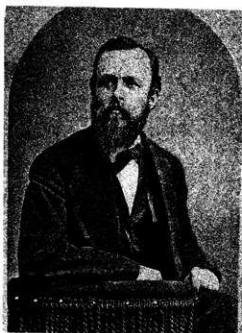
（2）1955 年の国史跡指定で二つの記念碑が対象に。

（3）品川区による「大森貝塚碑」地区の再発掘調査（1984・1993 年）

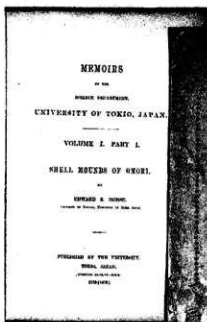
- ・1 次調査： 貝塚が 2 地点で現存することを確認： 後期中葉（B 貝塚）と晩期中葉（A 貝塚）。 → 大森貝塚地点が確定。
- ・2 次調査： 新たに 2 か所の貝塚と、後期中葉の竪穴住居跡 6 基（加曽利 B 期 4 基・曾谷 1 基）、住居を切る晩期中葉（安行 3 c 期）の溝 1 条を検出。

【参考文献・図引用文献】

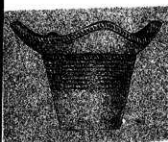
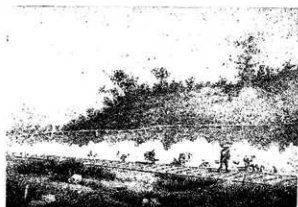
- ・E.S.モース（近藤義郎・佐原真編訳）1983『大森貝塚一付 関連史料一』岩波文庫（青 432-1）
- ・エドワード・S・モース（石川欣一訳）2013『日本その日その日』講談社学術文庫 2178（底本=1939 創元選書、創元社）
- ・大森貝塚保存会 1967『大森貝塚—発掘九十周年記念—』中央公論美術出版
- ・甲野 勇（編）1936・37『ミネルヴァ』創刊号～第 1 巻 6・7 号、翰林書房
- ・佐原 真ほか 1977「大森貝塚発掘 100 年記念特集号」『考古学研究』24・3・4、考古学研究会
- ・佐原 真 1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3（晩期）、講談社（特に p.167・*3）
- ・品川区立品川歴史館（編・発行）2007『日本考古学は品川から始まった—大森貝塚と東京の貝塚—』
- ・白井光太郎 1886「石鑑考」『人類学会報告』1・3
- ・坪井正五郎 1886「雑録」『人類学会報告』1・1
- ・坪井正五郎 1887「石器時代総論要領」『日本石器時代遺物発見地名表』
- ・坪井正五郎 1893-95「西ヶ原貝塚探検報告」『東京人類学会雑誌』8-85～10-106
- ・山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」
- ・山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1、先史考古学会
- ・山内清男 1939『日本遠古之文化』補註付新版、先史考古学会



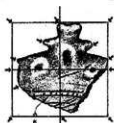
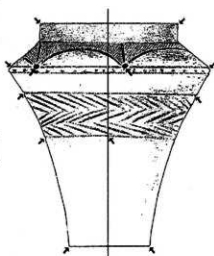
E. S. Morse(1838-1925)

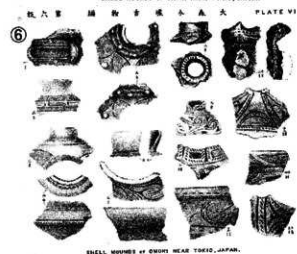
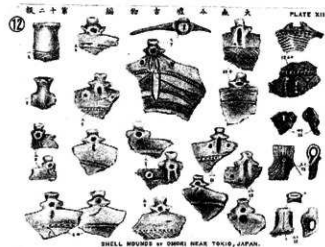
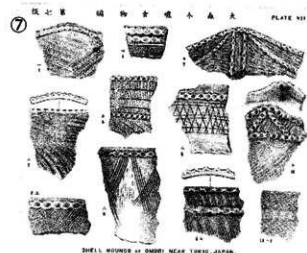
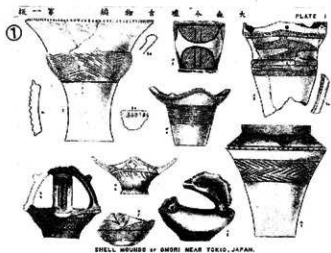


"Shell Mounds of Omori"



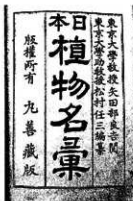
大森貝塚の発掘スケッチと出土した縄文土器

「大森村古物発見ノ概記」
(いずれも品川区立歴史館 2007)「中」字形の基準線をひく
矢印は針痕のみとめられる位置紙の基準線を引く。矢印は
針痕のみとめられる位置土器も計測して実測
(佐原 1977:p. 33)





松村任三(1856-1928)



49.『日本植物名彙』
明治17年(1894) 松村の代表的な著作で、日本人の手による初の植物図録。



松浦佐用彦(1856-1878)



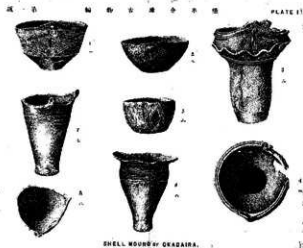
佐々木忠次郎(1857-1938)



飯島 魁(1861-1921)



60. 陸平貝塚出土・深鉢形土器
PLATE 3 縄文時代中期(加賀利E式)



61. "Okadaira Shell Mound at Hitachi"
明治16年(1883)
日本人の手による初の縄文報告書。体裁はモースの大森貝塚報告書に倣ったもので、図は写実的で精美だが、ややスケッチ化している。
発掘から報告にあたって、佐々木はモースに手紙を送り、成果を報告し、モースの指導を仰いでいる。

ミネルヴァ



原始文化 古代工藝
人類学 民族文化 総合雑誌
民俗学 民俗文化 総合雑誌
民俗学 民俗文化 総合雑誌
民俗学 民俗文化 総合雑誌

高子房
翰林書房

ミネルヴァ 創刊號 目次

- 第一圖版 泉 隆彦 第二圖版 上野國御所山古墳と岡地出土の石製下駄
第三圖版 千葉縣曾根貝塚の土器と埴土 第四圖版 北米サルカト遺跡の集
下駄の起源 後藤守一 (1)
酒の始原を尋ねて 大山 柏 (9)
貴人の墓地から發見された古代の酒器 古代オシベイの酒器 (13)

日本石器時代文化の源流と下限を語る

江上波夫 八幡一郎
山内清男 甲野 男 (46)

1936年

ミネルヴァ 四月號 目次

- 第七圖版 興安嶺山中ホルバン ボロツク(ワールマンハ) 存在 蘇丹皇帝陵墓
第八圖版 ラブレットを著けたヌスキューと北島發見のラブレット及ランブ
日本石器時代の終末期に就いて 喜田貞吉 (1)

ミネルヴァ 五月號 (第一卷第四號) 目次

第九圖版 京都市豊島區中新井石器時代遺跡の發見

日本考古學の秩序 山内清男 (1)

ミネルヴァ 六月號 (第一卷第五號) 目次

- 第十圖版 故 理學博士 松村敏氏
第十一圖版 若手縣下、綾瀬の磐石とオコナイ様

「あばた」も「えくぼ」も「あばた」 喜田貞吉 (1)

——日本石器時代終末期問題——

ミネルヴァ 七・八月合併號 (第一卷第六・七號)

有史以前の大東京 目次

又も石器時代遺跡から宋銭の發見 喜田貞吉 (86)

考古學の正道

——喜田博士に答ふ——

山内清男 (37)

ミネルヴァ創刊号の対談

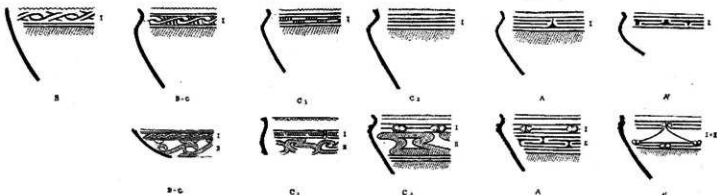
篠藤 縄紋土器の終りの時代は地方的に
夫々違ひがあると思ふ。そして最後は、
喜田先生のはれる鎌倉時代といふこと
も地方によつては必じも無茶の議論じや
ないと思ふ。それから奥羽地方のみでな
く、関東地方通でもメインストリート
から離れてゐた所は可なり遅くまでこれ
を続けるたと思ふ。少くも古墳の末期
にも地方によつては縄紋土器が使はれて
居た云ふことは考へてもいいんじゃない
かと思ひます。

山内 それは一寸黙頭けないですね。縄
紋式の末期、東北地方では龜ヶ岡式土器
が一般的ですが、この影響と思はれる土
器やその他の遺物が関東にも、中部地方
にも、畿内にもある。それから未だ確實
ではないが、もう少し向ふ迄行つて居る
らしい形跡がある。これらは皆その地方
に固有な末期の縄紋式に件つてゐるのだ
決して彌生式とか、古墳時代に屬しては
居るのではない。だから東北の石器時代
の縄紋式末期即ち龜ヶ岡式に併存して、交
渉を持ち得たものは、關西の彌生式でも
古墳時代でもない。矢張り縄紋式、この地
方の末期の縄紋式であることになる。従
つて縄紋式の終末は地方によつて大差な
いと見なければならぬでせう。

縄紋土器型式の大別(のち「縄紋土器型式の大別と細別」と改める) (山内 1937)

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ヶ谷×
前期	石川野× (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 2 a,b 3-5 6	蓮田・花下 山濱 關山 黒山 諸磯 十三坊	(+) (+) (+) (+)	鋒ノ木×	國府北白川 1 大藏山	瀧ノ森 1	高?
中期	(+) (+)	圓筒上 a b (+) (+)	大木 7a 7b 8 a,b 9, 10	御領家 阿玉家・勝坂 加曾利 E (新)	(+) (+) (+) (+)			黒木 2	曾根 阿高 出水 }?
後期	青御町× (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " Cl, 2 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× " × 保美×	宮藏× 日下×竹ノ内× 宮藏×	津雲下層	御領

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. ×印は型式名でなく、他地方の特定の型式と繋聯する土器を出した遺跡名。



第一圖 須賀文雄等と横濱文雄等の意見を示す横型圖
B, C, A, A' 須賀の意見 B-C B式とC式の中間の型式
C1, C2 横型圖

第一圖 須賀文雄等と横濱文雄等の意見を示す横型圖 (續)
1. 須賀文雄等 2. 横濱文雄等

龜ヶ岡式土器の大洞 6 型式細別 (山内 1930)

山内清男の方法・論理

「仁徳陵」副葬品 なぜ流出?

明治期に出土、埋め戻し漏れか

世界遺産に登録されている国内最大の前方後円墳・大山古墳(仁徳天皇陵、堺市)から明治初期に出土した副葬品のうち、金銅装刀子など4点が埋め戻されずに現存していた。その「新事実」は、考古学関係者に大きな衝撃を与えた。地中に眠っているはずの副葬品は、なぜ流出したのか。

(大阪文化部 辰巳隆博)

大山古墳は、天皇や皇族の墓として宮内庁が管理する「陵墓」で、発掘が厳しく制限されている。現存していた4点は、国学院大博物館(東京)が昨年6月に美術商から購入した。旧三井物産初代社長・益田孝(1848-1908年)のコレクションに含まれていた刀子(長さ10・5センチ、最大幅2・2センチ、厚さ0・9センチ)の刀身は鉄製とみられ、ヒノキの鞘はX線分析の結果、金メッキを施した銅板で覆われていた。銅製の留められていることが分かった。持ち手は欠損している。鉄の甲冑片にも金メッキの銅板が貼られていた。

刀子を紙に包まれて

おり、表には「明治五年」「仁徳御陵」などの番書とともに「栢」の印があった。同博物館の調査で浮かび上がったのが、明治期の絵画、栢木貞一郎(1841-1898年)の商家に生まれ、古美術の鑑定・収集家として知られた。文化財保護の黎明期だった1872年(明治5年)、奈良・正倉院、初めて行われた文化財調査(壬申検査)に参加。その最中、大山古墳の前方部の斜面が崩れ、石棺を取めた竪穴式石室周辺から銅甲や鉄刀など40点以上が発掘されたとの連絡を受



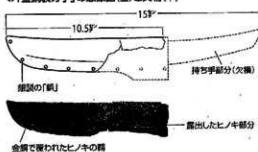
大山古墳の全景(2020年、本社ヘリから)。点線で囲っているのが副葬品が出土した前方部の斜面

5世紀の金銅装刀子 貴重

長は「埋め戻す際、取りこぼされたのを栢木が後拾ったのだろ」。工事に紙に包み、出所伝来を書いて後世に伝えようとしていることから、懐に入れようという行為ではなかったと思う」と言う。

栢木は73年に官位を得て明治政府の美術・博物館行政に携わった。副葬品は栢木の死後、後に国宝となる「源氏物語絵巻」などとともに、交流のあった益田の手に渡ったとされる。

①「金銅装刀子」の想像図(上)と実物(下)



宮内庁の担当者は発見について「急な話題で驚いている。国学院大から情報を得て、刀子などの由来を調べる必要がある」とする。

刀子は、形状をみると古墳の築造から数千年後の5世紀後半に国内で使われていたものに似ているという。5世紀の金銅装刀子は日本でも、朝鮮半島でも出土しておらず、貴重な品だったことがうかがえる。

注目すべきは、この刀子が主たる被葬者の副葬品ではないこと。前方後円墳では、主たる被葬者は後円部の頂上付近、2番手は前方部の頂上付近に埋葬されるのが普通だ。前方部斜面から見つかった刀子は、3番手以降の被葬者のものと考えられる。

大阪府立近つ飛鳥博物館の白石太一郎名誉館長は「前方部斜面にこれだけの豪華な副葬品があったという事は、後円部の主たる埋葬施設にはさらに豪華な副葬品が納められていることが予想される」と言う。今回の発見は、ペールに包まれた副葬の金銅を想像する手がかりとなりそうだ。

刀子は、堺市博物館の企画展「堺のなから〜金で魅せる・黒を愛する〜」で9月7日まで公開される。